Ahaki World
週刊 あはきワールド
2019年10月23・30日合併号　No.639

入江FTシステム＆横山式熱鍼療法セミナー 1/26開催

学会レポート（2）

第9回日本中医学会学術総会レポート

～現代医学やAIを取り入れる気運の高まりを感じる学術総会～

ともともクリニック　平岡遼

ツイート　いいね！ 58

10月5日、6日に第9回となる日本中医学会の学術総会が東京のタワーホール船堀で行われました。今回は台湾や中国からの参加者も多くいらっしゃる国際色豊かな中、「次世代につなぐ中医学」をテーマに2日間に渡り熱気に溢れた演題が行われました。

■弁証と臨床推論が統合されたワークショップ

本大会の開会は12:30でしたが、開会に先駆けて午前中に初学者向けのワークショップが開かれました。TOMOTOMO（友と共に学ぶ東西両医学研修の会）の石川家明先生による「みんなで弁証推論」と名付けられたワークショップは、古典から最先端のAIにまで話が及ぶ、中医学と西洋医学を俯瞰した壮大な内容でした。

初学者が西洋医学や東洋医学をどう学ぶのかという切り口から、西洋医学の世界で現在急速に広がっている臨床推論という教育の方法を紹介されました。実際の症例を題材に臨床推論の技法で徐々に患者の病態がはっきりしていくのを感じました。関節疾患は触診ができないと鑑別診断ができないため、臨床で頻度の高い膝と手指の関節の触診を参加者同士で行いました。続いて話は東洋医学にうつり、OPQRSTやSQなどの臨床推論の技法

今週号のPRの部屋はこちら
●入江FTシステム＆横山式熱鍼療法セミナー

■ヒューマンワールドのセミナー
●あはき師のための在宅ケア実践セミナー〔大阪〕
（2019/10/26,27）

★ヒューマンワールドの本なら→→→→→→　こちら
★ヒューマンワールドのDVDなら→→→→→　こちら

★あはき求人情報
鍼灸マッサージ師・柔道整復師の求人情報は»»　こちら

■あはきワールドの学割（0円）＆わかば割（50%OFF）
★詳細は»»　こちら

■投稿原稿募集
週刊『あはきワールド』では、研究レポート、論説、症

が実は中医学でははるか昔から行われていたという話から、先ほどの症例でそれらを使うことで「寒湿痹証」という中医学の診断まで導きました。またその診断までの流れから臨床推論と弁証の相似性について説明されていました。話は広がり、随証療法を最初に提案した曲直瀬道三の『弁証配剤医灯』に書かれている頭痛の分類を紹介して、現代中医学の頭痛分類とほぼ同じであることを示されました。さらに曲直瀬道三の記載が陰陽の分岐で症候論を展開しているのはAIのアルゴリズムである「決定木」を使っているとの指摘は眼から鱗でした。

■すでに中国で臨床活用されているAIを用いた東洋医学診断！

お昼にはランチョンセミナーに上海の大学で中医師免許を取得し現在も上海藤和クリニックで中医師として活躍されている藤田康介先生から、中医大学での勉強や中国における中国医学への取り組みの紹介がされました。

藤田先生の大学時代の話では、中国の大学教育には「抄本」というベテランの先生のカルテを写す作業があるそうです。時間さえあれば先生に「お願いします」と言ってはカルテを写させてもらうのだそうです。そんなアナログな作業があるかと思えば、それとは正反対に、中国ではすでにAIを使った「脉景人工智能補助診断系統」という東洋医学診断ソフトが実用化されているのだそうです。スクリーンに映し出されたソフト画面に実際に症例を入力して処方が出るまでのデモンストレーションもされました（写真参照）。本土では西洋医学から中医学に移ってきた先生が勉強するときなどとても役立っているそうです。また、ソフト内の「医案広場」というところから自分の患者さんの統計データを見られたり、他の先生の処方を見られたりと、ビッグデータを簡単に参照して診療に役立てられるシステムになっており驚きの連続でした。ちなみにこのAIのアルゴリズムに用いられているのは弁証論治ではなく方証相対なのだそうです。症状と処

例報告、エッセーなどの投稿原稿を募集しています。
★詳細は»» こちら

■ヒューマンワールドのメールマガジン「あはきワールド」は毎週水曜日に配信しています。
★配信登録は»» こちら

方が紐付いている方証相対がAIのアルゴリズムとの相性が良いからなのでしょう。

■解釈が様々あるだけで古典は唯一無二である

会頭である別府正志先生からは「傷寒論の三陰三陽編について～初学者の時こそ押さえておきたい“混乱しない”傷寒論～」という題目で、初学者が混乱しやすい三陰三陽の読み解き方を解説されました。大事なことは、解釈は様々あれど古典は唯一無二であること、古典の原本は歴史の中で何度も失われ後の人が再編しているので最も原本に近いものを探すことや再編の歴史を知ること、とのことでした。実際に再編の際に省略されてしまったために真逆の解釈が生まれてしまった例などを説明されました。現状で最も古いのは『宋板傷寒論』なのだそうですが、これは初めて著された漢代から見ると千年以上もあとのものと知り驚きました。

■弁証論治では病因病機をはっきりさせることが大切

5日の14:40以降は大ホールと小ホールにわかれ2つの演題が同時進行されていたので私が拝見したものをご紹介します。

大ホールでは、中国医薬大学の林伯欣先生による「弁証論治　その概念の再認識および未来展望」と題した招待講演でした。76歳女性の口腔ジスキネジアの症例を挙げて実際の弁証論治と処方、患者さんの変化を紹介されました。弁証論治で大事なのは、病因病機をはっきりとさせることで、患者の症状が治ろうが治るまいがその病態把握や診断を必ず振り返ってなにか反省することはなかったか、より良い診断治療はなかったかを考えることが大切だと強調されました。また、古典にある処方をそのままコピーするのではなく、古典ではなぜそう処方されたかと病因病機を考えることで目の前の患者さんの病因病機に応用できると説明されました。

■免疫に関与するのはタンパク質よりも脂質が重要！

16:20からは小ホールで「中西医結合の最前線」と題したシンポジウムがあり、3人の演者が話されました。

日本医科大学の高橋秀実先生は「中医学と免疫学：獲得免疫と自然免疫」と題して、タンパク質ではなく脂質こそが免疫をつくっている、という最新の研究報告を紹介され、東洋医学の衛気や営気を脂質から紐解かれていました。人間の免疫は、2011年にノーベル医学生理学賞を受賞した研究でもある樹状細胞にあるCD1分子を介した機構が重要であり、生薬の有効成分も陳皮の有効成分であるヘスペリジンや菊花のリナリンなど脂質が主役なのだそうです。

■キューバでは医療サービスの1/3が相補代替医療！

未来工学研究所の小野直哉先生は、「世界の統合医療の現状と動向」と題してアメリカ、アジア諸国、そして知られざる統合医療先進国としてキ

ューバの統合医療の現状を紹介されました。アメリカでは相補医療を研究する機関（NCCIH；国立補完統合衛生センター）が設立されており、年130億円が投じられています。また、軍事医療への応用が盛んで、帰還兵のPTSDに対する鍼治療や、兵士の疼痛コントロールに鍼治療が使われていることを紹介されました。

インドでは伝統医療に対する省庁 Ministry of AYUSHがあり、大臣もいるのだそうです。また、インドの伝統医療の知的財産を管理するTraditional Knowledge Digital Libraryというプロジェクトもあり、中国や韓国にも同様のプロジェクトがなされている中で日本はそういった取り組みはされていないことを問題として挙げられました。

知られざる統合医療先進国として紹介されたキューバは、1991年の共産主義経済圏の消失以来、深刻な物資不足によって国家存亡の危機となった背景から自然伝統医療を積極的に用いるようになったとのことです。キューバの家庭医は120時間の自然伝統医療の勉強が義務付けられており、35%の家庭医が鍼治療などの伝統医療を行っています。また、プライマリ・ケア患者の25%、入院患者では11%がなんらかの相補代替医療を受診しており、医療サービスの実に1/3を自然代替医療が担っています。これを支えるのは小学校からの代替医療に対する教育で、生薬を育てる授業なども義務教育で行われているとのことでした。

■AIを用いて認知症予防

東京大学大学院の酒谷薫先生は「中医学とAI：次世代中西結合医学の創出に向けて」と題して、産業技術総合研究所と共同で開発しているAIの紹介をされました。認知症を予防するために、血液検査データとMMSE（ミニメンタルステート検査）の結果をAIにディープラーニングさせたところ、診断感度・特異度ともに90%が得られたとの報告でした。現在は、検査データ、画像データ、既往歴、家族歴などに加えて中医学的四診所見をインプットして診断に用いられるAIの開発を行っているそうです。

■一般演題では様々な調査や症例報告

6日は9時から小ホールで一般演題でした。ベーチェット病の口内炎に対する半夏瀉心湯、CREST症候群に伴う指尖の潰瘍に対する四物湯処方の症例、急性期病院での鍼灸師の役割、妊婦への慎用・禁鍼穴の調査、頭鳴りに対する中渚と侠渓への透天涼を用いた鍼治療の症例、頚椎椎間板ヘルニアに対する接経取穴法の有用性など、各先生方の多岐にわたる症例や経験の報告がなされました。

■痛くない火鍼「毫火鍼」

午前最後は鍼灸実技講演で、香港中国中医特色療法研究院の劉恩明先生が細い毫鍼を用いた火鍼である「毫火鍼」を披露されました。火鍼は針先を火で炙って真っ赤になった状態で瞬間的に単刺をする手技ですが、鍼が太いため痛みが強いことがデメリットでした。毫火鍼は鍼の素材などを工夫することで0.25mm～0.35mmの細い毫鍼で火鍼をできるようにした手技です。長所は通常の火鍼と同じで、急性疾患が得意で効果が早く出ることだそうです。実際に模擬患者役の女性に施術されていましたが、ほとんど痛みはなく、刺鍼後の違和感もまったくないとおっしゃっていました。

■西洋医が短期間で東洋医学の臨床力を習得するには？

6日のランチョンセミナーは、熊本赤十字病院の加島雅之先生による「何を目的に、どう教育するか？ ～阿蘇セミナーの経験を通じて～」の演題でした。阿蘇セミナーとは日本中医学会が阿蘇で毎年開催している4泊5日の勉強合宿で現在まで35回も行われています。

西洋医学を学んでいた医師が東洋医学という概念のまったく異なるもの

を新しくインプットするには、まず大量の情報を溢れさせることで、理解するより先に「そういうものなんだ」と受け入れさせるという工程が必要だということでした。さらに阿蘇という外界から隔離した環境に身を置かせ、同じことを学ぶ同士と共同生活をすることで切磋琢磨させ、夜は語り合って楽しい思い出をつくること、エピソード記憶と結びつけるという仕組みによって学びを促進しているそうです。他にも多くのテクニックを駆使して、初めて中医学に触れる若手医師にいかに短期間で漢方処方を習得させるかを発表されました。中医学、日本漢方を俯瞰する視線から、いかにして古代の人が積み重ねた叡智を現在の臨床に活かすか、という情熱を感じる発表でした。

■国際交流と留学生演題

午後の小ホールは国際交流ということで中国や台湾の先生8人の演題と、日本から中国へ留学した2人の演題でした。

台湾の陳建宏先生は「台湾中医内科専門医師の規則の発展」という題で、台湾における中医師と中医外来の現状を発表されました。台湾では2018年12月時点で47,471人の西洋医師に対し中医師は6,880人おり、病院所属の中医師は764人のみで、残りの6000人強は診療所で働いているとのことです。しかし中医外来診療率は下降の一途で、保険総額比率では漢方外来は3.74%しかないという問題を懸念されていました。

国立陽明大学伝統医学研究所の呉建東先生は「台湾の癌への漢方薬使用状況」と題して、台湾における癌の発生率や癌発症前後の処方薬の変化について発表されました。台湾における女性の癌罹患数は、乳がん、大腸がん、肺がんの順番で、日本における順番とほぼ変わらないものでした。漢方薬は特に香砂六君子湯、甘露飲、酸棗仁湯、麻子仁丸が使われることが多く、特に大腸がん患者の7割に香砂六君子湯が処方されているとのデータ

を示されました。

台北栄民総医院伝統医学部の楊仁鄰先生は「前立腺がん合併骨転移疼痛における鍼刺治療症例の報告」との題目で発表されました。鍼治療は鎮痛、免疫調整、薬物副作用の抑制が可能であるとの結論づけ、さらに51の臨床報告から、癌性疼痛において使用頻度の高い経穴は、足三里100%、阿是穴87.9%、三陰交76.6%との結果を示しました。

台北市立総合医院 仁愛院区の林舜穀先生は「伝統医学の現代教育方法」と題して、臨床推論の技法を用いた中医学的診断について発表されました。西洋医学の問診技法であるLQQOPERA（発症様式、部位、増悪・寛解因子などの頭文字）と漢方処方を組み合わせたものを紹介しており、例えば写真のスライドようにオンセットと処方を対応させたり、症状の部位によって清熱剤を選べたりすることを示されました。東洋医学の診断思考に西洋医学の技法を取り入れた考え方は、初日の石川家明先生のワークショップの内容にも似た発想で、より良い医療のために畑違いのものも積極的に取り入れる柔軟さを感じました。

台湾華佗五禽経絡気功太極養生学会の李坤城先生は「華佗五禽経絡気功でどのように眼を保養するか」との題目で、華佗の五禽戯をもとにして考案された眼を保養する気功法を紹介されました。体の動きに合わせ眼球も運動することで6つの眼筋を動かします。長く続けている門下生では視力が回復した人も多いと報告されました。

香港中医薬学院の張清苓先生は「中医病因学の意義と運用」と題して、病因病機を明らかにして処方することで、めまいや多くの不定愁訴が大きく改善した2つの症例を紹介されました。

香港浸会大学中医薬学院の戴昭宇先生は「中学生の統合失調症に対する中医の診療例」と題して、統合失調症と診断された17歳女性と12歳女性の2つの症例を発表されました。いずれの症例とも患者は中学生女性で学業のプレッシャーが誘因となって、幻聴、不眠、集中力の低下などの愁訴が現れており、統合失調症と診断されていました。本当に統合失調症かどうか臨床的な判断が難しい症例でした。台湾では学校の試験倍率が高く常に周

りと競争しなければいけないためストレスの多い環境で、中学生では半数以上、大学生では7割以上、教員では8割以上に抑うつ症状がみられるそうです。

　最後の留学生演題では、北京中医薬大学に留学している2人の学生が発表されました。岩田秋佳先生からは「鍼刀と翼口蓋神経節の刺激によるアレルギー性鼻炎の治療」と題して、北京中医薬大学で行われている新しいアレルギー性鼻炎の治療法を紹介されました。“鍼刀”と呼ばれる尖端の形状が加工された鍼灸鍼を下関穴から鼻根に向かって刺入して翼口蓋神経室を刺激する手技を週1回5回続けることでアレルギー性鼻炎の症状が軽減するそうです。ただこの手法は痛みがあるために麻酔下で行うため日本での導入には課題があるようです。

　博士課程の崔衣林先生からは「傷寒論の一両に対する日中研究の比較」と題して、傷寒論内で記載されている「両」という単位がどのくらいの重さなのかの日中それぞれの研究の経緯をまとめて報告されました。新しい知見では日本でも中国でもおよそ14gという見解が主流で、これは今の日本の一般量の6倍、中国では4倍の量にあたるそうです。発表後に会長である平間先生からの意見があり、傷寒論はパンデミックのような急性の感染証を治すために生まれたために薬もドカンと多く使われたのではとの考察がありました。

■現代医学やAIを取り入れる気運の高まりを感じる学術総会

閉会の言葉を述べる平馬直樹会長

第9回となる日本中医学会の学術総会は、多くの演題の中にキーワードとして「AI」が入っており、AIによる東洋医学的な診断の可能性を大いに感じました。すでに中国ではAIによる東洋医学的な診断と処方が臨床で使われ始めているのには驚きました。また、「中西医結合」というキーワードもあり、東洋医学の教育や臨床の中に現代医学の手法や思考を取り入れることでより良い教育や医療を目指そうとする流れも感じました。古典を大事にしながらも新しい良いものを取り入れる気運を感じる学術総会でした。

ツイート

★この記事に対するご意見やご感想をお寄せください»» Click Here!

株式会社　ヒューマンワールド
東京都西東京市田無町7-18-4 TEL.042-444-3678 FAX.042-462-1231

Copyright(c) Human World Co.,Ltd. All rights reserved.